# 後期高齢者の外来化学療法の副作用への理解とセルフケア支援に向けて
## －FOLFIRI 療法を受けている患者に自己管理ノートを活用して－

キーワード：外来化学療法、セルフケア支援、自己管理ノート

○片桐未歩[1)]、松崎理恵[1)]、杉本眞佐子[1)]、廣田美佐子[2)]、小林正子[3)]
新潟県立吉田病院[1)]、新潟県立がんセンター新潟病院[2)]、新潟青陵大学[3)]

Ⅰ．目的

本研究は、A 病院の外来化学療法室で FOLFIRI 療法を受けている後期高齢者の患者３名を対象に、副作用の理解とセルフケア支援を目的とし自己管理ノートの作成と活用を試みた。

Ⅱ．方法

１.調査対象

A 病院外来化学療法室でFOLFIRI 療法を受けている後期高齢者の患者 3 名－Ａ氏男性(開始 24 年 5 月) B 氏男性(開始 25 年 5 月)C 氏女性(開始 25 年 7 月)

２．調査期間と内容

1) 平成 25 年 7 月～9 月に、自己管理ノート（名称、さくらノート、以下、ノート）を作成し、実際に使用してもらった。
2) ノートの活用について、面接調査(半構造化面接)を実施した。
3) 面接内容は①ノートの使い易さ、②体調の変化の理解、③家庭生活での活用とし、面接内容は記録した。

３．分析方法

面接内容の記述をもとに、ノートがどのように自己管理に役立っているかを分析した。

４．倫理的配慮

所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者には研究の主旨とプライバシーの保護・情報の厳重な管理について説明し同意を得た。

Ⅲ．結果

1．対象者のノート使用期間・回数

A 氏 84 日間に 4 回、B 氏 70 日間に 4 回、C 氏 63 日間に 3 回であった。

2．ノートについて

1)ノートは副作用を継続して観察できるよう 1 週間を 1 枚とした。副作用は JCOG 版[1)]の Grade 表記 0～3 を簡潔に記載し症状が重くなる時期を色分けした。ノートはあてはまる症状に丸を付けるだけの方法にし、他に日々の記録が書き込める大きな枠を設けた。

2)使用後の状況

(1)ノートの使いやすさについて

3 名とも簡単、付け易いと回答した。A 氏はノートの空白欄に気になることを記載していた。B 氏は箸の柄をスタンプにして印をつけていた。C 氏は初め家族が記入していたが、付けてみたら簡単ということが分かり自分で記載するようになった。

(2)体調の変化の理解について

A 氏はノートが無くても自分の頭の中に入っているが、治療後ご飯がおいしと感じた日が分かったと述べていた。B 氏は項目で黄色に色づけされている箇所は症状が出る頃なので、ある程度注意した方がいいと述べていた。C 氏は口の中が荒れる時期が家族にも自分もわかり、家族が食べられるものを準備してくれた。ご飯が食べられるようになると次の治療が始まると思ったと述べていた。

(3)家庭生活での活用について

A 氏は吐き気や食事がおいしく感じる時期は以前からわかっていると述べた。B 氏はノートを付けていると精神的に安心感がある、C 氏は今日治療すると明日畑に行けないから、事前に準備でき家族が協力してくれたと述べた。

Ⅳ．考察

ノートの活用状況から高齢者の患者でも自分で記入可能であるといえる。ノートの活用により副作用症状出現への心構えや、安心感が得られていた。また、症状が悪化する時期には家族が食べられる食事を用意してくれるなどの家族の介入にも役立っていた。自己管理ノートの副作用の有無をチェックする方法は、高齢者にとっても簡便であり、次の治療時期の把握や治療前の生活の準備にも役立っていた。患者は経過をノートに記録することで自分自身の症状を観察・把握でき、看護師は患者の在宅での状態の変化が把握しやすく、患者に即したセルフケアの支援ができる。今後はこれらの利点を活かし初回治療時からノートを活用しながら支援をしていくことが必要である。

Ⅴ．結論

1. さくらノートは、症状が出現しやすい時期を色分けしてあることや、当てはまる症状に○をつける形式のため高齢者でも使い易い。
2. さくらノートを記入することで、高齢者が家族と一緒に副作用の出現傾向が把握でき自宅でのセルフケアに活用できる。
3. さくらノートは、看護者が患者の状況を把握しやすく高齢者のセルフケアの支援を提供できる。

引用文献

1)有害事象共通用語規準ｖ4.0　日本語訳 JCOG 版